

津 和 野 紀 行

——洋学の源流をたずねて——

寺 田 芳 徳

一、つわ路の町

実に驚きの町であった。こんなに実感をもって、実に、と云う言葉がどこに、どんな時に、使えるであろうか。あの長いトンネルの闇を出た瞬間、車窓眼下はるかに展開する赤色の民家の屋根また屋根。曲りくねったいぶし銀の河一糸。それよりも弓形に反って降る汽車の上に、圧倒してくる山岳。息をのむ美しさは、布袋さんの雄大な頭を思わせる。周囲の山々を従えて聳え立つ姿は、一見して休火山の異様な怪しさを帯びている。天地創生の凄絶は若草のように神話と伝説を産み出したであろう。深い山峽の中に点在して棲息する民衆は、おもいおもいに此の火の山かげに住みついたのであろう。この異様なまでに凝集した造化の風土に芽生えた生命は何であったか。煙を散らして列車は浅緑の山腹めがけてか下る。ザアと奔流の山裾を降るようだ。出雲瓦特有の赤い民家の群落が迫って来る。前方は峽谷の先端が屈曲していて見通しは効かない。これはあとでわかったことだが、津和野の町筋も、曲りくねっている。学校の建物が見えて来る、と思う間に左手の濃緑の山に赤い鳥居がぎっしり立ち並んでいる。号音一声、汽車は鉄橋を渡った。錦川の清流、あれは稻生神社だと隣の乗客に教わる。直ぐ駅にすべり込む。駅のホームに降り立つ。このことは他所では何でもないことだ。然るに津和野は何かを感じさせるところに早くも異郷の脈膊を覚える。広島県の奥地西城町に入るときの地形を逆にしたような所だ。

駅舎の出口で、あのほていさんの山、青野山仰ぐように高く立ちほだかっている。然しもう、それは、旅人の心を慰めて惹入れるような、優しい姿として映じて来る。この町と廿日市とは昔いったいどんな関係があったのであろうか。青野山の南を越えて柿ノ木へ三里、六日市へ三里、周防の宇佐へ二里、安芸の津田へ四里、廿日市へ五里、廿日市まで十七里の間、士民は山谷を横絶して通路を求め、津和野藩は芸州廿日市を以て東上の海港とした。経済・文化・政治の細流も交わっては血縁を生じ果実を産む。

幾曲りもして商店街を南西に進むと町の奥行の味わいが深まって来る。ドリームランド。現代の津和野は、その夢の国だ。もつと実感を詠えば幻(まぼろし)の国だ。幅広い道と老松と白壁の武家屋敷が始まる手前の所で宿をとる。学校帰りの高校生達に混じるようにして焼芋の屋台車を通る。駅の方角へと流れて行く。玄関から長い廊下、津山の対鶴楼という旅館に似ている。座敷で「つわぶき」という銘菓を出され茶をすする。淡彩の包紙に淡白な味が旅情をいっそう強くする。すりガラスの窓を開けると、教会の尖塔が十字架を高くかまげて真向に見える。宿の話ではドイツ人のひらいたカトリック・チャーチだと言う。がっちりした尖塔の左手に青野岳が町を圧して峙っている。海拔幾らあるのか。乱山正に四囲の中に抱かれたこの小繁華、観光パンフレットを読んでみる。山河襟帯、山陰の小京都といわれる津和野は今から七百年前、開祖吉

見頼行が三本松城を築き、つわ藪の生い繁れる地の意をもって津和野と名づけられたと伝えられ、爾来吉見氏十四代、坂崎出羽守十六年、亀井氏（四万三千石）十一代の治城としていん盛を極めた。いま人口一万三千、方一里の中心部は城下町として人家がひきしめ、陰陽を結ぶ山口線の中央にあって、バス網の重要基点にもあたり、景勝の地として近県に知られている。町には先哲西周旧居、文豪森鷗外旧宅、徳川夢声句碑、やぶさめ馬場、坂崎出羽守墓、キリシタン殉教史跡（乙女峠とマリヤ堂）等々数多くの史跡を有し、太鼓谷稲成神社、曹洞宗永明寺、カトリック教会等地方信仰のメッカとしても知られている町で、舞舞（さぎまい）、盆踊と言った秀れた無形文化財と共に酒と銘菓の町でもある。又、標高九百八米の青野山は別名妹山と称せられ、夏のキャンプ冬のスキーで賑う。

年々交り行く産業都市に比べていかにもゆったりした、然も緻密重厚な気風を宿の隅々にも感じ取ることが出来る。名菓「源氏巻」の由来は、元禄十一年（一六九八）十一月勅使下向の御馳走役亀井能登守茲親（忠臣蔵の桃井若狭之助）は吉良上野介義央に典儀故例の指導をうけた。老獺貪欲な吉良は、公明正大な、当時の因習に通ぜぬ亀井茲親（第三代）を恥かして故例古実を授けない。茲親は憤り、上野介を斬って禍を絶つ覚悟を立てた。浅野長矩と同じ心境にあった。津和野藩の家老多胡外記（劇では加古川本蔵）はこれ御家の一大事と、表には藩公の決意を励ましながら、ひそかに吉良の門をたゞいて沢山の進物を贈り、深く主君の誘掖を懇請につとめた。こゝに吉良の態度は一変し、斬るに斬らさぬ上野介に従い茲親は懇切な指導の下に接待役の首尾をはたした。彼が後に外記の誠忠を感銘し、一国一城の危機を脱れたるを深く喜んだと言ふ。その時の進物小判の包に外記は源氏巻としたと云うことが国に伝わり、小判包の形の菓子で作られて源氏巻（げんじまき）と呼ばれ

ている。

お茶のあとで石橋昭雄氏紹介の先方に電話をかけて来意を告げる。午食を命じて中庭の梅花や青野山をカメラにおさめる。江戸時代からあると言う此の宿にふさわしい梅の老木だ。池のむこうの垣根ごしに三本松城の山嶺が見えている。昭和二十六年、今から十年前の此の頃、津和野高校の英語教師兼舎監にと招じられ、向学を理由にその時は断ったことを思い出す。廿日市の英学を考えてゆく中に津和野がうかび上がったと言ふよりも早くから心の縁は浅からぬものがあるようだ。

幾とせを津和野恋ひ来ぬ

ほのぼのと白梅にほう

妹山の春

二、郷土館と鐘の音

三月二十五日、日曜日。この日は雨がひる前から降り始めた。昨晩七時頃まで教育委員会と、郷土館で研究した。

この両者は同一の建物の中にある。津和野駅に着いたのが昨日の午後十二時三十一分、旅館吉野屋に到着いたのが十二時四十分、ひるめし後、郷土館に入ったのが一時三十分。途中、殿町（とのまち）の古風な景観殊に藩学養老館の昔ながらの姿、前を流れる疏水と鯉の群泳、あやめの若緑は印象深い。教育委員会に民俗学、地方史研究の森澄泰文氏を訪ね館内でいろいろ資料の説明を聴く。史料文献類の接写で三時間、館内諸資料の従覧と説明で二時間くらいを費やした。夕暮れて七時過ぎ、郷土館横の錦川にかゝる大橋を渡って殿町の養老館前をそとろに帰宿するころは、なんとも名状し難い旅情にとらわれてしまった。国老多胡家の門構えに対する旧落校の黒塗りの門。真直ぐな広い殿町通りは秋の明倫館前

とよく似ている。このあたりから宿まで二丁くらい。カトリック教会の前まで来る。ステンドグラスが赤・青・黄色とりどりに美しく輝いている。夢の国に来た様だ。白い頭布、黒い礼拝服の修道女が向うから来て教会の門に吸い込まれて行く。疲れた足をとめて門柱に寄り添って見る。

「幼花園」と云う門札がかかっている。其所で満一才から六才までの幼児を預かり、教育して仲々盛んとのこと。これは宿の女中が言っていた。その門を入れて右に会堂の前まで行く。昔の家老職の屋敷の一つだと言ふ。夕闇が立ち込めて尖塔が黒々と仰がれる。会堂の中から洩れるステンドグラスの灯りだけが温かに光って、建物のまわりがほっと明るく浮いて見える。窓のない入口の木の扉の把手に、厚い紙札がぶら下げてある。イエス・キリストの受難・復活をしのんで毎週金曜日七時半から礼拝いたしましたよと言う意味のことである。静寂なイースターの清らかな気に充されて宿にたどり着く。湯殿へ行こうと座敷を出る寸前、教会の鐘の音がひびいて来た。はじめは何の音かと思つた。カランコロンと言うよりもチャラン・チャラン・チャラン……と言うような快よい連続音——薄い金属の板を二枚触れ合わせる何組も吊るし、振つたとき出るような震動音で鳴り渡る感じだ。町中にとどろく。「あゝさっきの、七時半の礼拝が始まったのだな」と思いながら長い廊下に出る。森澄氏からは乙女峠の切支丹殉教史、長崎の故長井博士、津和野教会バウロ・ネーベル神父の話などを聞いた。

夕食の膳に、あわびの生づくりに 肝臓が入っていた。当地の珍味だそうだ。明朝まで借用を許された諸資料を筆写にかゝり、深更二時過ぎに及ぶ。漸く寢床に伸び、睡り込む。夢うついでサイレンが鳴つたようだ。暗い。枕の側に置いた夜光時計で六時だが、まどろむかと思えばまた鐘の音が……教会の塔から鳴り響いている。時計は六時半だ。小鳥の啼く声。窓辺が少しづつ明るさを増す。七時、起床。

八時半になる。宿の直ぐ前の郷土史研究家沖本常吉氏を訪ね要談。一時間後辞して郷土館に再び赴き、蘭学関係の資料文献を写真に撮る。

再建養老館に於ける蘭(創建は天明五年(一七八五))は安政二年(一八五五)七月で、だいたいこの前後から津和野藩校養老館に於ける蘭医学の研究が行われるようになった。その筆頭は長崎でシーボルトに師事して帰藩した吉本蘭齋(安政六年歿)である。そのほかには井関見節、室研、吉野杏林等があり、森林太郎(鷗外)の父静男も蘭医であった。林太郎の蘭学の師は室研であった。(1)すなわち、明治二年頃から同五年出府上京のときまで林太郎は父とそれから同藩医室研の下蘭学を学んだ。(2)研は津和野藩蘭学の先駆者室柳仙の孫で、大阪の緒方洪庵の高弟であった津和野の人室良悦に就いて蘭医学を学んだ。(3)西周(にしあまね)の方は、蘭学を同藩士野村春岱に学び、蘭英書を江戸で研究するため脱藩し、のちにオランダのレイデン大学に留学した。森家と西家は近い親戚に当り、林太郎が十一才で上京したとき、西周の家に預けられて、本郷の進文学舎にドイツ語を学んだことはよく知られている。日本の近代化にとって重要な仕事を遂げた人物が、時を隔て、前後、津和野街道を芸州廿日市に出て、桜尾の舟屋敷と海港を後に東上したかどうかと言う疑問が脳裡に去来して止まない。多数のオランダ語関係の文献類を見た。正午を過ぎてから、冷雨となった。

三、堀田仁助について

午後一時に郷土館を出て、森澄氏の案内で傘をさして弥栄神社にむかう。舞の伝説を聞きながら山上の稻生神社に詣でる。俗に大藪谷稲成といつて廿日市の桜尾に今もその分神が祀つてある。佐伯好郎博士は早くより此の事を御研究になり、津和野藩廿日市屋敷の守護神として津和野より分祀したと言われる。定説として動かない事実である。他所では

たいてい稲荷と書くが此所では稲成と記すのも珍らしい。朱の鳥居がト
ンネルのように建ち並んでいて、社殿も立派である。参道の中途にある
宝物殿では、とくに堀田仁助の文政五年（一八二二）に製作したと言う
天球儀と、地球儀を見る。寛政十一年（一七九九）彼は幕命によって蝦
夷地を測量し、官船で函館より根室に到った。九ヶ月後の同年十一月江
戸に帰り地図を作製して復命した。これは蝦夷地、すなわち北海道の航
海測量の嚆矢で、このときに仁助は自ら種々の測量機を製作して測量は天
度及び海路にまでわたった。伊能忠敬の江戸蝦夷図測量にさきだつこと
数年の先駆と言ひ得る。彼は老齢を理由に忠敬を幕府に推挙したものと
伝えられ、文政九年（一八二六）八十才で津和野に帰藩を許された。彼は
延享四年（七四七）正月父の住所である芸州廿日市の蔵屋敷に生れ、長
じて同藩の和算三大家と称せられた。大槻玄沢が蘭学階梯を著わした天
明三年（一七八三）に幕府の天文方属員となり製曆に従い、十人扶持白
銀数枚拝領の身分であった。帰郷後は子弟に数学を教授し、文政十二年
（一八二九）九月五日津和野に永眠した。(4)学者としてかくれた傑物で
あったと思う。宝物殿と養老文庫と郷土館に保存されている各地海岸測
量図、世界図、コンパス等もみな堀田仁助の江戸土産と言ふべきもので
ある。発明家としての彼を知る立派な遺品に敬意を捧げて、山麓に降り
錦川の畔を松並木に沿って川上の方に向う。

四、森思都子女史との対談
それから向岸に渡って、森鷗外の旧居に立寄る。佐藤春夫の書いた

「うた日記」（鷗外遺著）の一節が刻まれた詩碑がある。奥まった小屋
の構えは、同じ典医をつとめた西家のそれとかわらない質素なもの。
「キタ・セクスアリス」の思い出。いまこの旅行も終りに近づいたことを
感じながら、予定のように、此の旧居に、林太郎の実弟潤三郎の未亡人
思都子女史（森家の親戚で養老館儒学者米原綱善の息女で潤三郎に嫁す）
を訪い、幸いに対談の希望を叶えられた。昭和廿六年一月中国新聞紙上
の鷗外岩国出向同地より乗船東上説は同紙学芸部の河田茂氏が思都子夫
人の回旧談に直接よって記したもの。これに対して拙稿は「庄原英学校
覚書」第二節第七項で、西周と森鷗外等の当時の津和野青少年達の東
上は、廿日市海上港によるとの説を述べた。河田氏より二ヶ月前の廿五
年十一月稿了したもので(5)かねて疑問を解きたいと思っていた。このよ
うな考えをいろいろ説明して、問題点を尋ねてみた。すると同夫人の話
より意外にも三田尻に出たことが、ほど明確となった。鷗外の父は周防
三田尻の代々医家吉次氏の出で、津和野に蘭学を学びに来ていたところ、
森家に婿入りに迎えられた。彼が林太郎を連れて上京したのは明治五年
のことであった。父子は、連れ立って、三田尻の吉次家に泊し、父の生
家の人達に別れを惜しんだ。このときの記念写真が筑摩書房の日本文学
アルバム「森鷗外」（一九五四年刊）に収録されている。この写真が
三田尻の吉次家の人々といっしよに撮ったものと註記される要があるう
と思う。三田尻へ行くには当時人力車であったろう。そして津和野の西南の
徳佐を経て、その先の土福（どぶく）と云う所から山越えて三田尻に出
る街道があった。三田尻から先はよく知らないと言ふ御話であった。七
十の坂を幾つも出て老人だと自分で云われるけれども、上品だ。今日の
御話しぶりは確りして居られるとは、森澄氏が後で話であった。三田
尻から船で出ても、人力車や歩いて岩国を経ても、何れも津和野藩の旧
舟屋敷のある廿日市に立寄ったように思われる。少くとも西周の場合は

確かであろう、そして陸上交通は高くつくから、費用の安くてすむ海路東上が有力な考えではないかという説にまよつてみた。思都子女史もこの点に余り異存ないとの事で、あとは鶴外と印税のことなど想出話が出て談話し、三時半に同家を辞去した。

つはぶきの雨に濡れたる津和野かな

宿に帰って荷物を作り、冷雨に暗さを増した町かどを、態々裏町の通りに廻る。中村吉蔵の生家は直ぐわかつた。小路に沿いながら駅舎に急ぐ。幼少年期の生活が凡ての人の生涯に元素となつてゐるのだ。四方乱山を任する青野岳の中腹から上は雨雲に覆われている。廃市と言うには余りに清冽・重厚な印象。桃季自から蹊を成す、伝統は不言にしてよく其の心をつくす。森澄泰文氏に別れを惜しみ、啓導に対して感謝を捧げ、列車に乗る。山口線で二時間ばかり、もと来た鉄道を、小郡駅で乗替えて、夜半、広島に近い五日市駅に帰着した。

五、津和野と廿日市の関係

このような探訪旅行を実行に移すに当って、佐伯好郎先生の啓導は、強い動機と成つた。この津和野紀行から得た知識は多いとまで云い切れないが、重要な点を幾つか解明する鍵を含んでゐると思ふ。比較文化史的な関心も、先ず政治と経済を中心とする歴史の背景から、実証にとりかゝらねばならない事を自覚するであらう。津和野郷土館の「鹿足郡誌」に拠つて次の二点を指摘してみたい。(6)すなわち、廿日市に対する津和野の関係は元和五年(一六一九)にさかのぼることが出来る。第一の点は広島藩と津和野藩の接触である。

『福島正則改易の際の警固』

元和五年五月広島城主福島正則罪あり国除かる、城地受取として安藤对馬守、永井右近太夫、西国諸侯を率いて広島に下向す、此時政矩(自

註、二代藩主)病を力めて広島に下張し安藤、永井の両使に対面す、兩使政矩の病重きを見て津和野へ帰城せしむ、之に於て家臣多胡主水(自註、たこもんど)を大将として広島に留む、其人數左の如し。

多胡主水 上下四十人 組の者廿三人

牧図書 上下廿五人 組の者十九人

磯江平内 上下十六人 組の者十四人

芝崎式部 上下十六人

山中清右衛門 上下十六人

草刈三郎右衛門 上下十二人

池田久兵衛 上下九人

進 伊助 上下八人

村上孫兵衛 上下八人

石井五郎右衛門 上下七人

村尾左兵衛 上下七人

中小姓 大小姓

鉄砲、足輕兵糧始世話役総勢七百八

政矩此等の兵を残して津和野に帰る、七月中旬安藤、永井両使城地を請取り国中の仕置を定めて伏見に帰る。八月府令あり。政矩を召す。

(中略)

第二の点は、左の機縁から生じて、いっそう複雑な法律的关系をさえ想起させるであらう。すなわち、次のような文献資料を見る。

『廿日市屋敷借用』

津和野藩より上方往来の節には従来廿日市島屋七右衛門方へ宿泊せら

るゝを例とする、往々不便なるを以て、同駅にて船土地借入御茶屋建設の議あり、御往来本陣島屋市右衛門、廿日市庄屋山田治右衛門へ内命あり、兩人芸藩へ交渉せしに経過良好なるを以て、寛永七年（自註、一六三〇）三月二十五日多胡主水（自註たこ・もんど）使者として広島へ出張し、公然依頼する処あり、同年十一月交渉協約成り、寛永八年五月十八日、廿日市借用地引渡につき津和野藩より、梶尾甚作、中川八助出張し、芸藩より郡代官を始め、廿日市庄屋立合し受渡を結了せり。全借入地左の如し。

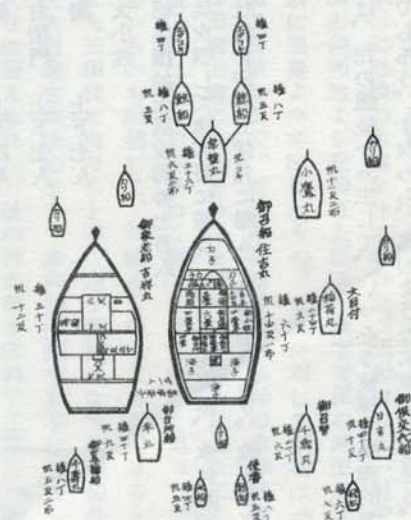
一、御借地只今迄有来之御茶屋の土地は佐伯郡廿日市桜尾城山西、土居八幡宮之社地、佐伯郡蔵本同地弥右衛門屋敷と申地長五十一間、横四十八間浜手有次第左之通。（桜尾之方屋敷東側）竹藪之方四十間。（御方丈屋方）北之方、五十三間（廿日市町之方）西之方、五十三間（浜之方）南之方、五十四間半、右者二十三間半塀覆之内六間に十三間三尺浜手有次第、御船入は桜尾城山麓東の方、清岸畑より烏帽子岩迄沖の方三十三間、清岸畑柱横七間半、山の手百十九間、烏帽子岩横二十間。

右の如く、土地交渉完了せるを以て、当事者には贈遺をなし落着を告げたり、其後追年買添地となし、殿舎を初め、御船蔵土蔵定詰長屋出来し、船頭水主を抱え、高津よりも定詰員を廻され、其後廿日市より室津迄通船を出さるゝに至れり。

右のようにして廿日市は芸藩内に在りながら、一方でその一角を津和野藩の居留地に供出した。因みに、高津はいまの島津県益田市内にあって日本海に臨む港として知られ、津和野藩の領地であった。ここから船頭等を廿日市に詰めさせた。それについて「鹿足郡誌」の附図を調べる。次に掲げる「御参観御船之行列」中に御家老船、吉祥丸の右下に記されて

いる高津海子廿一人と、御召船、すなわち、藩主の乗用船の後部に記されている海子などは高津の方から選ばれたものであろう。

御参観御船之行列



室津（むろつ）は言うまでもなく上代、中世から発達した海港として知られ、近世では四国・九州・中国大名参勤交替の着船・乗船の港となつた。幕府は姫路城主を管理に当てたけれども、明治維新後は大船の寄港に適せざるために衰微した。今の兵庫県揖保郡御津町室津である。

津和野藩主の東上に、また津和野産紙の紙蔵が置かれた廿日市の桜尾とその海港が明治以後さびれていったのも同様の理由によると思う。然し廿日市と津和野の血縁も金縁も、さらに文化的関係も約三百年間継続された事実、此の地方の歴史を研究する者にとって頂門の一針以上の意味を有している。小鷹丸や吉祥丸のことも古老の語り伝えがある。

廿日市の堀田真造氏によると此れ等はだいたい三百石船で、舟大工は呉の近くの音戸より招いて建造させた。かくして、前記の図解は、立派な船列隊形を示し、古くから日本海軍の優秀性はこれだけでも歴然たるものがある。

このように、二つの点は両地方の歴史的関係を明らかにしている。津和野藩の重要な国産品たる楮紙は廿日市の土蔵倉に運ばれ、船積して大阪方面で売捌いていた。この点は別に経済史的関係として述べる時がある。彼我の人物としては、津和野藩政の要路を司った多胡主水と、廿日市庄屋と鑄物師の要職をかねた山田治右衛門を重要な視点と考える。それは別に起稿するものとして、いまは次の点を述べて結びとしたい。

廿日市に対する津和野藩の關係は、広島藩の場合と同列の比ではないけれども三世紀余にわたる歴史的關係は、佐伯博士の強調せられるような血縁的な關係、言いかえれば土俗的、然も文化的な連環をもつに至ったことは疑問の余地がない。堀田仁助が廿日市舟屋敷詰藩土の家に生れたことは既に述べたとおりであるが、田原榮、福原允のような理学者及び英学者を同じ廿日市屋敷とその界限から輩出したことをどのように考えるか。(7) 少くとも此の津和野紀行によって、藩校養老館の和・漢・洋の学問教育は、同藩廿日市屋敷詰の士族たちにも精神的文化的な連帯性を自覚せしめたであろう。津和野街道はもとより、山陽道を上下する参勤交代と人々の往来、財貨の輻湊流通は、安芸宮島に近接した廿日市をいっそう宿場町として賑わせると共に、交易中継地として海港の役割を担うようになった。津和野藩主の御茶屋(殿舎)、船蔵、紙蔵、藩士定詰屋敷等が所謂租借地に設けられて、住吉丸、吉祥丸、小鷹丸、稻荷丸などの大小の船が発着した。農・工・商 諸民の彼我における士族との交渉は、次第に彼我士民の血縁的關係を生じた。津和野から受けた廿日市の文化的恵沢も測り知れないものがある。養老館蘭学の系譜は、

幕末・維新の社会文化史的背景として、廿日市の教育。文化、とりわけ洋学にどのようなはたらきを促したか。この問題にたいする自問自答が、津和野紀行となった。

(廿日市高等学校教諭)

【註】

- (1) 伊藤佐喜雄「森鷗外」大日本雄弁会講談社昭和十九年五一頁
- (2) 森潤三郎「森鷗外」「鷗外森林太郎伝」
- (3) 津和野町郷土館資料「室柳仙」
緒方富雄「緒方洪庵伝」岩波書店昭和十七年二七七頁(適々齊姓名録)
石州津和野室良悦安政三年五月七日入門
- (4) 伊能忠敬の蝦夷をはじめ全国沿岸測量は寛政十一年(一八〇〇)から文化十二年(一八一二)まで幕命による。「日本史小辞典」坂本太郎監修山川出版社昭和三十二年参照
堀田仁助(泉伊)については「津和野教育沿革略及び人物略伝」澄川正弥編津和野町役場発行昭和三年一五一―一六頁及び「鹿足郡誌」第二篇其三第九節当藩の名士三九一頁
- (5) 拙稿「庄原英学校覚書第二節」廿日市高校

研究論集鉄樹第一号昭和三十六年一一九―一二二頁

国鉄 廿日市駅

(6) 「鹿足郡誌」編纂者野津左馬之助発行者島根県鹿足郡町村長会代表望月幸雄昭和十年印刷内外出版印刷全四四〇頁附図六十六枚

「福島正則改易の際の警固」同前書一三〇―一三二頁

「廿日市屋敷借用」同前書一三八―一三九頁

多胡主水真益については同前書一六六―一七七頁

山田治右衛門については河面道三郎編「山田家系譜」大正十年及び石田米孝「定本鋳物師山田次右衛門」山陽女子高校社会科紀要第二輯昭和三十年を参照。そのほか「芸藩通志」「大日本地名辞書」

(7) 註(5)に同じ。又、市島謙吉「随筆早稲田」南有書院昭和十年、平凡社「新撰人名大辞典」昭和十二年なども参考となる。別に「廻廊」に寄稿された佐伯好郎博士の廿日市郷土史の研究。

昭和三十七年一月十五日記

「廻廊」誌より転載

・汽笛一声新橋を、と歌われて、汽車が新橋―横浜間を走って九十年明治五年十月十四日明治天皇をお迎えして盛大な鉄道開業式が行われた。廿日市駅も創業六十五周年を迎える。これは廿日市駅の開業ということよりも、もっと大きな意味において、われわれ町民の胸をゆさぶるものがある……。列車の開通により新しい郷土の誕生という町史の一頁をかざるからである。……………

この六十五年を迎えた廿日市駅があゆんだ道をたずねてみよう。山陽鉄道株式会社が広島―徳山間を開通したのが明治三十年九月二十五日。日清戦争が終ってこの間の工事が急速に進められた海岸線を走ることの線は地御前区間に遂道が二ヶ所、それに急勾配のある所などといろんな難工事が続いた。創業当時は単線で一日数回の運行をしたものである。現在の駅舎も創業当時に建築されたのである。その後明治三十九年十二月一日山陽鉄道株式会社から国有に移され大正四年二月陸橋が完成駅の規模も次第に整備されてきた。昭和三年六月二十七日復線工事が完了して上り列車と下り列車がそれぞれ別の軌道で運転を開始した。信号機も手動式から昭和十四年四月二十日に自動信号機となった。国鉄も汽車から電車へ近代化される日も近々。架線用のコンクリート柱も施設され陸橋も去る。昭和三十七年三月三十一日大きく改築され、地御前の遂道改良工事も進んでいる。現在山陽本線は上り八本下り八本の列車が運行している。廿日市駅での一日平均乗降人員一、二七〇人、手荷物の発着約一〇〇〇個一日平均収入乗客四六、六四三元、手荷物六、五八二元、一日平均貨物の取扱は小口扱発着一〇屯、貨車扱一八四、九屯、一日平均収入は小口扱七二、一七四円、貨車扱一〇六、九五〇円。駅員は駅長以下二四名現在の駅長は十六代である。